

ドイツ日記

小山 和紗

ドイツでの時間

尼崎市青年使節団員としてドイツに行けると決まったとき、嬉しい気持ちと少しの不安がありました。英語に自信がない私にとって、ちゃんとコミュニケーションがとれるのが大きな不安要素でした。ましてやホームステイなんて未知の世界でした。初めはなかなか会話も続かず、どうしようと思うときもあったけど、一緒に過ごすうちにだんだんと距離が縮まっていきました。ホストファミリーとは、庭でバーベキューをしたり、ハンバーガーを作って食べたり、晩ごはんは本当においしく楽しみな時間でした。またその日の出来事を話したり、飼っていた犬や猫と一緒に遊んだりもしました。一緒に折り紙をした夜も濃い時間でした。みんなでわいわい言いながら、鶴やお花を折って、ずっと笑っていたような気がします。ホストファミリーと過ごす一日では、念願だったサッカーの試合に連れてってもらいました。向こうの人はみな熱狂的ですごい盛り上がりでした。宇佐美選手が出場しているところも見ることができとても良かったです。夜はプレラー市民祭に行きました。ホストファミリーであるアナに買ってもらった民族衣装をきて、歌ったり踊ったり、ビールを飲んだり...日本では味わえないようなお祭りでした。毎晩共に過ごしたホストファミリーはかけがえのない存在になりました。まるで本当の家族の様に受け入れてくれて、お風呂やベッド、ごはんなどいたれりつくせりでした。もし

自分も姉妹都市交流などで海外の方を受け入れることがあれば、同じようにたくさんのおもてなしをしたいなと思いました。

使節団員の活動の中で、アウクスブルク市内のたくさんの施設や街並みを見てまわりました。市庁舎近くには路上にマーケットがあったり、石畳の街並みにトラムが走っていたり、観光ブックで見た景色が目の前に広がっていて、とても興奮しました。また念願だったノイシュバンシュタイン城にも行くことができました。お城まで馬車に乗ったことや、その道のりで見た広大な自然はずっと忘れることはないだろうと思います。振り返ってみると楽しかったことばかり浮かんできます。日本にはないものがたくさんあって、必ずまたドイツに行きたいと思いました。



プレラー市民祭でホストファミリーと



高台から市内を一望

日本での時間

今回のドイツ派遣でドイツと日本の様々な面での違いを学んだり、温かい人々との出会いがあったのはもちろんなのですが、派遣前の日本での研修期間でもたくさんものを得ることができました。一つ目は尼崎の魅力です。フェアウェルパーティーで使う動画を作るために尼崎の北から南までいろんな場所を撮影しました。これまではガラが悪く、何だか汚いようなイメージでした。しかし公園も多く緑もたくさんあり、寺町には昔の街並みも残っています。さらに工場地帯も夜景のポイントになっていたり、商店街のあたりもいろんな人が集まる明るく楽しい場であると気づかされました。ガラの悪い市ではなく、北から南まで素敵なポイントのある市だなと思いました。二つ目は市役所のことについてです。住民票など以外で市役所に行くことがなく、どんなことをしているのか詳しく知らなかったのですが、今回のことで市の職員の方と関わる機会が増え、いろんな話を聞くことができました。芸術家やクリエイターさんの作品を展示する“A-Lab”や、工場夜景ツアー、有名パティスリーによる小学校でのお菓子作りなど、いろんなことが企画され、

行われていることが分かりました。一つ目も二つ目も、尼崎の代表として行くことで、改めて尼崎市と向き合うことができたことで得られたことだと思います。今では、市の良さを周りの人たちに話したくなり、他にはどんな魅力があるのか知りたくなりました。三つ目は共に行動した使節団員との繋がりで、初めの頃はまだよそよそしく、どこか気まずい空気もありました。でも10回の研修や10日間ドイツで一緒に過ごしていくうちに、どんどん仲が深まっていきました。ただ仲良くなるだけでなく、それぞれ年齢や学んでいることも違うので、話している中でたくさん刺激を受けることもできました。また団長や副団長とも親しくなれ、ドイツにいる間に団長の誕生日があることがわかったと、急きょみんなで誕生日サプライズをしたりもしました。無事日本に到着した後も、別れが惜しくなかなか解散にならず、何度も「すぐご飯行こう！」と次に会う約束を立てていました。このドイツへの旅がなければきっと出会っていなかったと思います。このメンバーと出会えて繋がりができたことだけでも、本当に参加できてよかったと思います。



尼崎青年使節団のみんな

最後に

今回アウクスブルク市との姉妹交流に参加することができ、本当にたくさんのことを学ぶことができました。今後は、ドイツに行ったよと言うだけでなく、そこで学んだことや感じたことを、ちゃんと自分の将来のために生かしていかなければならないと思いました。貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。